

競争と協調

全学共通教育推進機構長 柏木 治

先日、「小澤征爾～中国と結ぶ終生の絆」という番組を見た。この世界的な指揮者が六歳まで育った中国で、オーディションによって選ばれた有能な若者たちにオーケストラ教育を施すというもの。一人っ子政策のなかで育ってきた若者たちは、ソリストとしては優れた技術をもちながら、他人の音を聞いてそれに合わせる事がなかなかできない。最初、この現実に打ちのめされつつも、指揮者はオーケストラの指導を通じて少しずつ音楽的協同の意味を教えていく。個と全体、競争と調和というものの難しさをあらためて考えさせる番組であった。

少子化の結果でもなかろうが、いま、コミュニケーションの回路を閉ざすような風景が街のあちこちにみられる。視線の先は携帯画面か雑誌のページに落ち、耳はヘッドセットに塞がれ、口はよほどのことがないかぎり会話を紡ぐことをしない。急激なメディアの進化と相俟って、競争社会の内部で個性を輝かせることが求められる時代に、他者と適度な関係を保つ知恵や周囲と協調することへの努力を奨励する風土はしだいに失われつつある。差異化を前提とする個性や競争は、他者への関係や想像力が欠如するとたんにギクシャクするものだが、こんにちの社会は、人との「まじわり／かかわり」のなかでこそ個性が磨かれるという本来のありようをととても困難なものにしているようにみえる。

売れる本のタイトルがおしなべて「頭のよい人、悪い人」「出世する人、しない人」式の、截然たる二項対立構成になり、実際、授業においても「あれかこれか」ではなく「あれもこれも」「あれでもなくこれでもなく」といった答えをすると急に不機嫌になる若者が多くなった。その一方で、学生の個人的な会話には「～とか」「～みたいなの」といった曖昧表現がやたらに多い。極端な断定的明解さと不安げな曖昧さとの奇妙な不協和音——これは、わたしたちの時代が個と全体のほどよいバランスを失い、個性を輝かせる基盤そのものにおおきな軋みが生じている症候ともとれる。今年の新入社員の意識調査によれば、「個人の成果が直接成果に結びつく職場」より「チームを組んで成果を分かち合える職場」を希望する回答がほぼ八割、調査開始以来最も高い水準となったという。若者の敏感な嗅覚がこうした軋みを早くも嗅ぎ分けはじめた結果なのかもしれない。

第10回FDフォーラム報告

平成17年12月7日(水)14時から17時まで、千里山キャンパス尚文館マルチメディアAV大教室において「教育評価を問う」をテーマに開催した。第1部は基調講演で、同志社大学教育開発センター所長、圓月勝博先生から「GPA制度と厳格な成績評価」というタイトルで、GPA制度の概要と同志社大学における実践についてお話をいただいた。第2部はパネルディスカッション形式により、工学部の先生方および学生諸君に参加していただき、「教育評価について—外部評価・JABEE審査を通じて—」というテーマで、工学部の外部審査の取り組みについて議論をした。教育評価の方法は、授業のあり方と直接関わる重大な事項である。関西大学においても、新しい教育評価のあり方を模索していく必要があるだろう。

基調講演 GPA制度と厳格な成績評価

同志社大学 教育開発センター所長 圓月 勝博



GPA制度の活用等による成績評価の厳格化は、現代日本の大学が直面する一つの大きな課題として、広く議論されるようになった。しかし、GPA制度に関しては、依然として様々な曲解がしばしば見られる。そこで、まず、議論の出発点となった大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」(平成10年10月26日)の関連箇所をよく見てみよう。

厳格な成績評価については、例えばGPAと呼ばれる制度を活用した取組と呼ばれる制度を活用した取組を行っている大学もある。

各大学においては、このような例も参考としつつ、各大学の状況に応じた厳格な成績評価の仕組みを整備していくことが必要である。なお、厳格な成績評価の実施により最低限の質の確保を行うと同時に、優秀な成績を修めた学生には表彰を行うなど、学生の学習意欲を刺激するような仕組みを導入することも重要である。

GPA 制度自体は、厳格な成績評価を実現するための方策の一例にすぎない。最も大事な点は、GPA 制度の導入などを契機にして、「各大学の状況に応じた厳格な成績評価の仕組みを整備していくこと」なのである。

2004 年度から GPA 制度を導入した同志社大学の事例を挙げながら、成績評価制度についてご一緒に考えてみたい。5 科目を履修した段階で、100 点満点制度なら平均点 80 点になる 2 人の学生の成績モデルを想定して、旧来の 100 点満点方式（学生成績通知書記載）と優良可方式（成績証明書記載）に現行の GPA 方式を並べて、成績評価結果の対照表を作成してみた。

学生 A の場合

	100点満点	優良可	GPA
科目 1	95	優	4.0 (A)
科目 2	85	優	3.0 (B)
科目 3	60	可	1.0 (D)
科目 4	30	不可	0.0 (F)
科目 5	0	不可	0.0 (F)
総合成績	80	優2、可1	1.6

学生 B の場合

	100点満点	優良可	GPA
科目 1	90	優	4.0 (A)
科目 2	90	優	4.0 (A)
科目 3	90	優	4.0 (A)
科目 4	70	良	2.0 (B)
科目 5	60	可	1.0 (D)
総合成績	80	優3、良1、可1	3.0

上記 2 人の学生の履修状況を見たら、普通、誰もが学生 B の方がずっと充実した学習活動を行ったと判断するだろう。しかし、100 点満点制度の場合、総合成績の平均点は、まったく同じ 80 点である。また、優良可制度の場合、優の数には一つの差しかない。私たちの実感と一番よく合致するのは、約 2 倍の格差を明示する GPA 制度の結果である。成績



評価の厳格化とは何かと問われると、難しいことを考えがちだが、成績評価が個々の学生の学習活動を正しく反映しているかどうか、そして、成績評価の良し悪しが国際社会の一般人にもわかりやすいかどうかという常識に立ち戻ってみるべきであろう。

旧来の成績評価制度が私たちの実感から遊離する理由は、不合格科目の成績が総合成績算定からあらかじめ除外されていたからである。旧来の成績評価制度にも、それなりの教育的意図はあったのだが、現実的には、履修登録および正課学習に対する学生の安易な態度と、授業運営および成績評価に対する教員の責任感の欠如を助長する傾向が強かったことも否めない。そこで、同志社大学においては、GPA 制度導入にあたって、不合格科目の成績も総合成績に算入することを新制度の一環として決定したのである。

優良可方式では明確にならなかった学生 A と学生 B の格差が GPA 方式において明確になる理由は、上位成績を細分化していることである。すなわち、従来の優良可方式なら、100 点も 80 点もすべて優と記載されるが、現行の GPA 方式では、従来の 90 点以上を 4.0 (A)、80 点以上を 3.0 (B) とし、評価区分に修正を加えたからである。この措置を導入した理由は、「学生の学習意欲を刺激する」ためには、すべての正課科目に関して、「優秀な成績を修めた学生」の優秀性が成績通知書および成績証明書という正式文書に正確に反映することが必要と考えたからである。

同志社大学においては、GPA 制度導入に合わせて、シラバスに成績評価基準の明示を義務付けるとともに、科目別 GPA 得点分布をホームページ上で学外にも公開している。相対評価か絶対評価かという問題は、同志社においても話題になったが、導入教育科目と再履修科目などをいきなり一律の得点分布にそろえることが必要だとは考えていない。今後、公表された GPA 得点分布を検討資料として、各科目（群）にふさわしい得点分布を現実的に考えていく作業にとりかかる予定である。



第10回FDフォーラムは平成17年12月7日に千里山キャンパスの尚文館にて開催された。今回のフォーラムのテーマは「教育評価を問う」であった。ゆとり教育の実施により入学してくる学生の高校までの学習内容の質的低下が懸念される一方、研究者の研究努力により学問の深化が進んでいる。教育機関としての大学のいわば「守備範囲」は基礎と最先端の両面で広がっており、教育改善の取り組み無しにはこのような現状に対応するのは困難である。その中でも、「達成度」等によって学生の授業内容の習熟度を評価し、授業改善の取り組みにフィードバックすることは、「Plan-Do-Check-Action」の各段階を経て教育改善の実を挙げる上で非常に重要である。上記のテーマは第10回という、通過点とはいえひとつの区切りである記念すべきFDフォーラムのテーマとしてふさわしいものに思える。

フォーラムは2部構成であり、第1部では、同志社大学の圓月勝博先生による基調講演「GPA制度と厳格な成績評価」、第2部では主として本学工学部教員と学生によるパネルディスカッション「教育評価について—外部評価・JABEE審査を通じて—」であった。

GPAとは、Grade Point Averageの略であり、例えば評点を4点満点として、A(特に優秀)=4点、B(優秀)=3点、C(良)=2点、D(可)=1点、F(不合格・不受験)=0点の5段階評価とし、成績を加重平均することを主旨とする成績評価方法である。基調講演では、GPAの定義、主旨、同志社大学における導入の経緯、GPA制度の導入による効果と問題点に関する大変興味深いお話をいただいた。現在の100点満点の評価方法と優・良・可・不可の4段階評価の併用による厳密な成績評価の点からみた制度

的混乱という指摘、およびそれに代わる5段階程度のGPAによる成績評価の提案は、授業・教育の達成度を厳密に評価するという点で、個人的には非常に明快で分かりやすいものであると感じた。

パネルディスカッションでは、まずパネラーの工学部教員より、現代社会の要請に基づく工学教育のあり方とJABEEについての紹介、工学部の教育および研究に関する外部評価の概況とその結果、工学部における教育達成度評価の取り組みの現状等について報告があった。達成度評価に関しては、個人達成度評価カルテを作成して学生自身が学習・教育目標の達成度を確認することができる仕組みや、学生の自己評価と教員による評価の間に一定の相関がある反面、教員評価に比べて自己評価が著しく高い群が存在すること、学生の関心の高さなど、興味深い内容が報告された。次いで実際に達成度評価を受けた学生へのインタビューを行った。新制度の導入による戸惑いや、自己の取得した成績がどのように学習教育目標の達成に反映されるのかが分かり、学習意欲の向上につながる等、学生からの率直な意見が得られた。質疑応答では、本学工学部教員および学生の他に圓月先生にもパネラーとして参加していただき、教育評価についての活発な意見・情報の交換が行われた。

成績評価のあり方に関する議論や具体的な取り組みが教育改善における非常に重要な要素であることに疑いの余地はない。本フォーラムをきっかけに本学でもその取り組みがより活発化することを望んでやまない。

(工学部助教授、前FD部門・授業評価部門委員会委員)

